

OSCE におけるビデオを活用したリフレクションによる 学生の気づきと捉え方 ～作業療法学生 3 年次の臨床実習前 OSCE における予備調査～

小林幸治 會田玉美 野村健太
(Koji KOBAYASHI, Tamami AIDA, Kenta NOMURA)

【要約】

《緒言》実習前 OSCE（客観的臨床能力試験）でこれまで評価者の評価コメントと学生が得た印象を元にフォローアップを行ってきたが、学生が自己の課題に気づきにくい課題があった。

《目的》OSCE 後にビデオを活用したリフレクションを行い、学生が自己の課題に気づく程度や内容、この方法への学生の捉え方を知り、実施法や課題を検討した。

《方法》総合臨床実習前 3 年次学生 56 名に対し、ビデオを活用したリフレクションの目的や利点を説明、対象学生を募り、同意を得た 20 名（35.7%）を対象とした。OSCE 終了後、学生は①自分の課題に気づいた程度を回答、②自己の試験動画を視聴、③視聴して気づいたことの程度や内容を回答、④グループ討議をおこなった。

《結果》ビデオを活用したリフレクション後、学生の気づきの自覚は 10% 増加した。その内容は自身の行動特徴や態度が多かったが、技能面は少なかった。対象学生からは、この方法は自分の課題に気づきやすく導入して欲しいという意見が多かったが、学生全員に実施することには慎重な意見があった。

《考察》OSCE 後のビデオを活用したリフレクションは振り返りを深めるため有用と思われたが、有効な振り返り方をさらに検討する必要がある。

キーワード：ビデオを活用したリフレクション、OSCE（客観的臨床能力試験）、経験学習モデル

I. 研究の背景

リハビリテーション実務者を育てる作業療法臨床実習の到達目標として、「典型的な障害特性を呈する対象者に対し、許容される臨床技能の習得¹⁾」が求められている。2020 年度入学学生より厚生労働省による理学療法士作業療法士学校養成施設指定規則（以下、指定規則）が改正され、その中で実習前後に Objective Structured Clinical Examination（客観的臨床能力試験）（以下、OSCE）を行うことが求められるようになった²⁾。評価実習や総合臨床実習では見学だけでなく直接対象者に関わることが必要となるが、これらの実習に出られる状態かどうか、総合的知識、基本的技

能、態度を備えていることを養成校で確認する必要性が明示された²⁾。OSCE は医学教育で必要な技能と態度を身に付けさせるための有効な教育評価法として普及してきた。模擬患者による模擬臨床状況を設定し、外部の評価者が判定を行うものである³⁾。目白大学保健医療学部作業療法学科（以下、本学科）では、各学年の臨床実習前 OSCE を実施し、試験課題や評価方法等の改良を重ねてきた。また、2019 年度より実習後 OSCE も導入しているが、これは「実習における教育結果を臨床実習後の評価等で行うこと²⁾」という指定規則に沿うものとして位置付けている。

一方、本学科の教育理念に関して、講義・演習科目と臨床実習との関連では、総合的知識・基本的技能・

態度の育成について、次の①～④を結びつける意図がある。①講義・演習では、知識と体験の理解を組み合わせ、自ら学ぶことを重視し、problem-based learning (PBL: 問題基盤型学習) や Team-based learning (TBL: チーム基盤型学習) を活用する。②実習前 OSCE で、作業療法の実際場面を模した課題を課し、外部評価者からの助言を受け、実習に必要な技術を確認する。③臨床実習では、クリニカル・クラクシップ方式(作業療法参加型臨床実習)で指導者の技能や臨床思考過程を教わり、模倣しながら身に付ける。④実習後に、経験、学習した内容をもとに実習後課題(事例報告)を作成し、本学科教員(以下、教員)の指導を受け、振り返りを面談およびセミナーで行い、最後に実習後 OSCE で評価を行う。以上を本学科における臨床能力の教育としている。

作業療法学生(以下、学生)が習得すべき臨床能力は、①検査測定・治療技術、コミュニケーションスキルなどの基本的な臨床技術、②基本的技術を支える知識、③臨床推論能力、④専門職としての態度であるとされる⁴⁾。この臨床能力を評価するためには、「知っている」だけでなく「知っている事を活用できる」、さらに「どのようにふるまうか」を示せる必要があるとされる。OSCEでは実際の場面をシミュレートした状況を模擬患者などによって示し、その問題を解決する能力を客観的に評価する⁵⁾。実施後に評価者から学生へフィードバックが返されるが、短い時間でその指摘内容を理解することは実際には難しい。

これまで本学科で OSCE の課題となっていた点の1つに、OSCEを受験した学生が、自分がなぜその評定になったのか、試験後に教員を交えた小グループでの討議によるフォローアップを行っても実際の場面を振り返りながら理解することが難しく、臨床実習の準備に有効に生かすことができていなかったことがある。その一因として、できている部分とできていない部分について細かく伝え、患者の状態や反応を学生と振り返り、最も適切な方法で実施できたかというフィードバック⁶⁾を行っていなかったことが挙げられる。

それに対し、今回、ビデオを活用したリフレクションがこの課題への解決策として検討された。この方法は、アクションリサーチの研究ツールとして開発され、「実践の中でリフレクションを行うための方法」、「研究者が対象者の変化を多面的に捉えることが可能

であり、また、対象者が自分の変化に気づくための方法」として有効⁷⁾とされて研究が進められている。作業療法学生の OSCE においてビデオを活用したリフレクションを用いた先行研究は、大浦ら⁸⁾(2014)は OSCE 実施後にビデオ・フィードバックと学習のふり返りを併用したことが実習に役立ったという学生の自覚につながったとした。Giles ら(2014)は⁹⁾模擬患者による模擬場面課題とビデオによる振り返りおよびフィードバックが実習準備教育として有用と報告している。一方、OSCE においてビデオを活用した振り返りによって学生が得た気づきの内容や、この方法に対する学生の捉え方に関する調査は少ない。

II. 研究の目的

総合臨床実習前の OSCE においてビデオを活用したリフレクションを行い、学生が実習に向けた課題に気づく程度やその内容を知る、この方法に対する学生の捉え方を知る、実際の OSCE における実施方法や課題を検討する、以上を研究の目的とした。

III. 研究の方法

1. 研究対象者(対象学生)の選定

研究対象者(以下、対象学生)の選定は、図1の手順で行った。

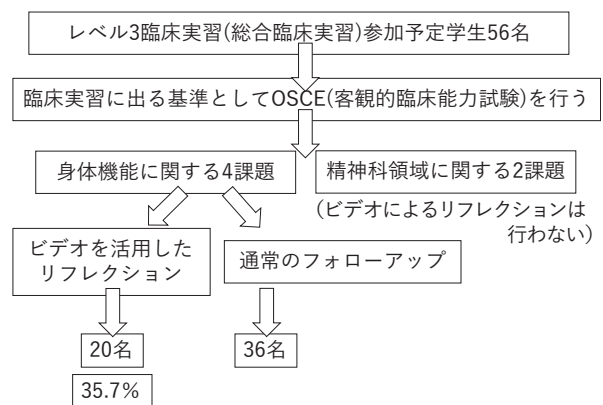


図1 対象学生の選定

2019年度総合臨床実習8週間2期(科目名:レベル3臨床実習I・II)に参加予定学生3年次生56名に対し、実習前 OSCE においてビデオを活用したリフレクションと通常のリフレクションのいずれかを選択してもらった。ビデオを活用したリフレクションを選択した学生を研究対象者(以下、対象学生)とした。実施期間は2019年11月。

2. OSCE 実施方法

試験課題は、身体領域課題 4 種類と精神科領域課題 2 種類を準備した。このうち身体領域 4 課題をビデオを活用したリフレクションの対象とした。課題内容は、脳血管障害による中等度片麻痺を持つ患者への①関節可動域訓練、②随意性回復訓練の指導（麻痺側手でのワイピング）、③更衣動作指導、④車いすからベッドへの移乗動作指導とした。

OSCE 評価者は、臨床実習指導者に必要な臨床経験 5 年目以上の医療や介護施設に勤務する作業療法士に依頼した。評価者は 1 試験課題 5 分間の終了後、学生に 2 分間のフィードバックを口頭で行った。模擬患者は、大学近隣地域在住の高齢者にボランティアで依頼し、事前に 2 回 OSCE 実施要領を用いて模擬患者や試験課題の設定を説明した。

3. ビデオ撮影方法

OSCE 受験学生 56 名のうち、対象学生 20 名の試験順をそれ以外の学生の前に配置した。全 6 試験課題のうち、身体領域 4 課題を撮影した。撮影は、撮影後にそのまま視聴できる点からタブレット（Microsoft 社 Surface 3）を使用し、これを三脚に固定し、試験中は動かさずあらかじめ印をつけた撮影位置で一定方向から撮影した。対象学生と模擬患者が映り、両者に圧迫とならないよう 2m 程度離れた。撮影操作はボランティア学生（上級生）が行い、被検者である対象学生が 1 つのブースで試験を終了すると、そのタブレットを次の試験ブースに三脚ごと移動した。音声は、事前設定時に模擬撮影を行った際に聞き取れたことと、機器の移動を伴う点からタブレット付属のマイクを使用した。この作業を 1 人の対象学生に対し 4 回繰り返した。

4. セルフチェックシートの作成

以下 5 つの質問に 5 件法と理由（自由記述）で回答するセルフチェックシートを作成した。短時間で回答しやすいように意識した。①ビデオにより自分の課題に気付いたか、②ビデオを観てどんな点に気付いたか、③ビデオを活用したリフレクションは臨床実習の準備に役立つと思うか、④ビデオを活用したリフレクションは負担になるか、⑤ビデオを活用したリフレクションを OSCE に取り入れるべきだと思うか。これらは文献 7) ~ 9) を参考にし、本研究目的に基づい

て選択した。

5. ビデオを活用したリフレクションの実施手順

実施手順を図 2 に示す。この手順は、対象学生に対し、事前に「ビデオを活用したリフレクションの進め方」手順書（A 4、1 ページ）を用いて口頭で説明した。OSCE 終了後、落ち着いてビデオを視聴するために専用にした教室で、対象学生は、①ビデオを活用したリフレクションを行う前に、評価者のフィードバックをどの程度理解できたか、実習に向けての自分の課題に十分に気づけたか、どのようなことに気づいたかについて、「OSCE 振り返りシート」を記入した。②他の対象学生と距離をおいた個別の席で 4 試験課題分のビデオを 1 回視聴した。その際、外部評価者によるフィードバックを思いだしながら、評価結果（評定とコメント）を手元に置いて視聴するように伝えた。③10 分経過後、教員が対象学生の席を巡回し、ビデオを視聴して気づいたことを述べてもらい、教員は一言コメントを返した。この際に述べてもらった内容は、教員用記録用紙に記録した。④③は合わせて 30 分間実施した。④「セルフチェックシート」に、ビデオを活用したリフレクションで臨床実習に向けたどのような課題にどの程度気づいたかを記入した。⑤対象学生 4 ~ 6 名と教員 1 名のグループで、ビデオを活用したリフレクションの感想や今後実習に向けてどのような準備が必要と思うかを話し合った。以上が終了した後、対象学生には撮影動画を入れた USB メモリーを手渡した。

通常の OSCE 後フォローアップは、学生 6 名と教員 1 名のグループで実施し、学生は外部評価者からのフィードバック・評定とコメントを元に、よくできた

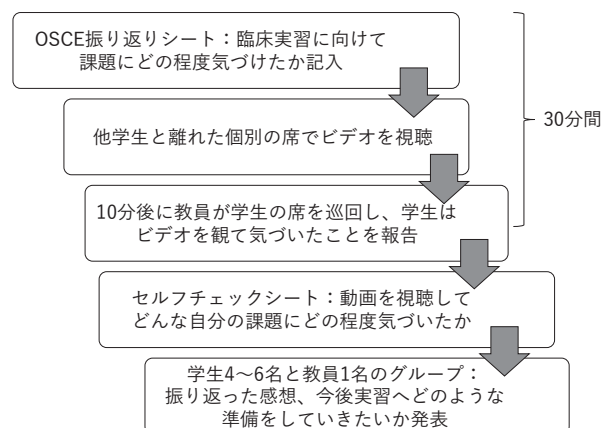


図 2 ビデオを活用したリフレクションの流れ

と思う部分とできなかったと思う部分を順々に発表し、教員や他の学生と意見交換をする内容を50分間実施した。

6. 臨床実習後のビデオを活用したリフレクション

臨床実習前 OSCE との変化を明らかにするため、臨床実習後に同一方法によるビデオを活用したリフレクションを計画した。

7. 倫理的配慮

本研究は目白大学医学系倫理審査委員会での承認(20-医005)を得て実施した。ビデオを活用したリフレクションについては説明書と同意書を使用して説明した。これは、全学生にこの方法を行えるかどうかを設定上不確実であり、ビデオで撮影されることで過度に緊張を高める学生への配慮から希望制とした。ビデオ視聴は他の対象学生と3m以上離れた、視線の合わない席で視聴できるようにした。ビデオを活用したリフレクションと通常のフォローアップは同じ50分間とした。

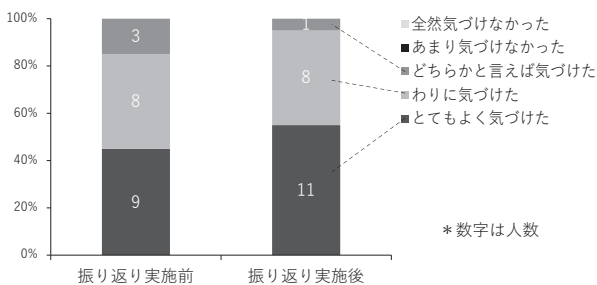


図3 ビデオを活用したリフレクション前後の自己の課題に対する気づきの程度

IV. 研究成果

1. 対象学生の属性

56名中20名(35.7%)がビデオを活用したリフレクションを選択した。男性2名、女性18名。

2. ビデオを活用したリフレクション前後の自己の課題に対する気づきの程度

OSCE 後(ビデオを活用したリフレクション実施前)と実施後に自己の課題に気付いた程度を図3に示す。実施前は、「とてもよく気づけた」9名(45%)、「わりに気付けた」8名(40%)、「どちらかといえば気づけた」3名(15%)、「あまり気づけなかった」

「全然気づけなかった」各0名であった。

実施後は「とてもよく気づけた」11名(55%)、「わりに気付けた」8名(40%)、「どちらかといえば気づけた」1名(5%)、「あまり気づけなかった」「全然気づけなかった」各0名だった。

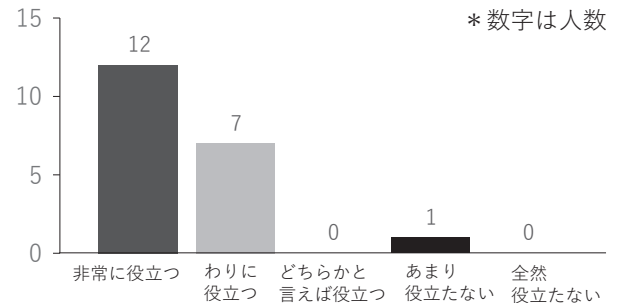


図4 ビデオを活用したリフレクションの実習役立ち度

3. ビデオを活用したリフレクションで気づいた内容

セルフチェックシートより、試験課題遂行中の自己の行動特徴や、模擬患者への関わり方についての気づきとして記載された内容は、「声が小さい」、「表情が固い」、「姿勢が悪い」、「声掛けのタイミングがずれている」、「自分の不安や焦り」、「動きの硬さや同じ口調の繰り返し」、「模擬患者との距離が不適切、あるいは向かい合う姿勢が不適切」、「髪を頻回に触っている」等があった。

技能面への気づきとして記載された内容は、「麻痺側上肢へのリスク管理の配慮が足りなかった」のみだった。また「良くできていた部分も発見できた」という意見もみられた。

4. 対象学生はビデオを活用したリフレクションが実習に役立つと捉えているか

「ビデオを活用したリフレクションは実習に役立つと思うか」の質問に対する回答は「非常に役立つ」12名(60%)、「わりに役立つ」7名(35%)、「どちらかといえば役立つ」0名、「あまり役に立たない」1名(5%)、「全然役に立たない」0名であった。

自由記述では「客観的に自分の姿が見える」、「通常の振り返りでは記憶をたどってフォローアップを受けるが、非常に緊張しているので記憶が曖昧で振り返りも曖昧になっていた」、「指摘を受けるだけではイメージが付きにくい動画で理解が深まる」、「自分が行えていないところを知り実習対策ができる」があった。「あまり役に立たないと思う」と回答した1名は、その

理由に「自分の課題が面接場面での話し方だったので音声聞き取りにくく、この方法に不向きだと思った」と記載していた。

5. ビデオを活用したリフレクションを負担と捉えているか

「ビデオを活用したリフレクションは負担が多いと思うか」の質問への回答は「非常に負担が多い」0名、「ある程度負担になる」1名（5%）、「どちらかといえば負担になる」4名（20%）、「あまり負担にならない」14名（70%）、「全然負担にならない」1名（5%）であった。

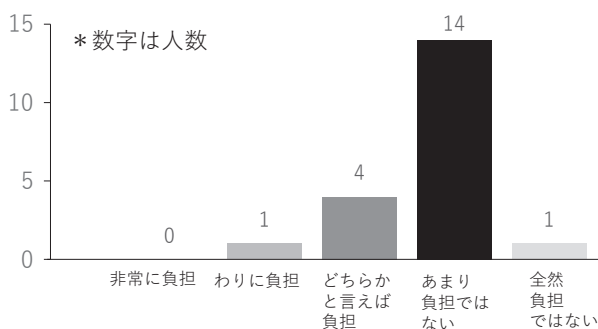


図5 ビデオを活用したリフレクションの負担度

自由記述として、「固定式でタブレットだったため負担が少なかった」、「カメラで追われたりしたら緊張が高かったと思う」、「取られることは緊張するがためになる」、「恥ずかしさはあるが行った方がいい」という肯定的な意見が多かった。一方で、「よくできなかった課題の動画を見ることには心理的に辛いことが少しある」という記述があった。また「通常の OSCE より試験会場に人が多くなり緊張が高まる」、「撮影係の人が待機しているのが気になった」という意見もあった。

6. 対象学生はビデオを活用したリフレクションを取り入れる利点を感じているか

「ビデオを活用したリフレクションを OSCE に取り入れるべきか」の質問への回答は、「ぜひ取り入れた方がいい」1名（5%）、「取り入れた方がいい」7名（35%）、「どちらかといえば取り入れた方がいい」6名（10%）、「どちらとも言えない」2名（10%）、「取り入れない方がいい」0名であった。自由記述では、「記憶が曖昧にならないで済む」、「具体的に理解でき実習に生かしていける」、「良いことも悪いことも気付

ける」という肯定的な意見と、「緊張感が高まるので任意でいいと思う」、「ビデオが怖い人もいたので希望制がいい」という慎重な意見があった。

7. その他の意見

その他の意見として、「ビデオの緊張よりも OSCE の緊張の方が大きかった」、「実際は撮影されていることを半分くらい忘れていた」、「後から振り返りがやりやすい」、「USB をもらえるので復習できる」、「評価者の言葉と動画での視覚的情報が両方あって振り返りやすかった」、「取られている意識もあって頑張れた」があった。

8. 実施中に生じたトラブル

今回、実施中に次のトラブルが生じた。①4 試験課題のうち、対象学生 1 名の 1 課題が撮影できていなかった。②対象学生が模擬患者へ説明する音声聞き取れない場合があった。各試験ブースはホール形式の大教室において簡易パーテーションで仕切った状態であり、また対象学生に撮影されているストレスを減じるため 2 m 程度距離を離して撮影した。その結果、周囲の音が混入し、緊張から小声になった対象学生の声は十分録音できていない場合があった。③撮影中は起動したタブレットを振り返り用教室に移動した後、立ち上がり時間に時間がかかった端末が数台あり、視聴時間を 30 分確保できない場合があった。

9. 臨床実習後のビデオを活用したリフレクションの中止

計画で予定していた臨床実習後のビデオを活用したリフレクションは、新型コロナウイルス感染症拡大の影響のため中止した。

V. 考察

1. ビデオを活用したリフレクションでの気づきの程度と内容

ビデオを活用したリフレクション実施前と実施後では、「とてもよく気づけた」が 10% 増加した。セルフチェックシートに記載された気づきの内容は、対象学生が特に「模擬患者への説明の仕方」や「姿勢や態度」の特徴をよく捉えたと思われる記述が多く挙がっていた。ビデオを活用したことによって、これらの点に実感をもって振り返ることができていたことがうか

がえた。臨床実習指導者は「学生を評価する際、重きをおいている点」¹⁰⁾として、知識面や技能面よりも医療人・社会人としての基本的態度を挙げる場合が多い。このことから、学生がビデオを活用したりフレクションによって態度面の内容に多く気づいたことは大きいと考えられる。

一方、今回、技能面への気づきは少ない結果だった。臨床実習では熟達者の言動を観察する際に、漫然と見ているだけでは見落としが多いことが指摘されており、着目して観察する箇所を提示しておくことや、メモを取りながら観察し、観察による学習効果を高める工夫が示されている¹¹⁾。その他、評価者の技能に対する評価コメントを意識してビデオを観る、評価者や教員と一緒に振り返る、などの方法も有用と考えられる。

また、上條¹²⁾は、教育実習等での学習を効果的にする「実習リフレクション」を示し、経験内容をテーマ別に分解し、それについて自分の意見を発表し、他の学生の意見を聞いて、教員の解説や個別へのフィードバックで納得するという方法による気づきの広がりを述べている。これらを基に、動画視聴中に着目して見る箇所を記載したワークシート等を用いて、気づいた点を記録する方法や、この個別の振り返りを小グループでの振り返りに繋げる方法が考えられる。

2. ビデオを活用したりフレクションによる経験学習の促進

OSCEの目的には、臨床実習に出られる基準に達しているかを評定することの他に、教員は臨床実習のプレ経験（事前経験）として学生に自信をつけさせる機会という目的もあると捉えている¹³⁾。しかし、自由記述の中に「通常は記憶をたどってフォローアップを受けるが、非常に緊張しているので記憶が曖昧で振り返りも曖昧になっていた」とあり、従来の学生の記憶に頼った振り返り方法では、学生自身が気づいて学ぶ機会が十分でなかった可能性がある。

「学習のための評価」としての形成的評価では、単に個々の学生の到達度が示されるだけでなく、目標とどの程度違っているのか、その差を埋めるにはどのような行動が必要なのかが示される必要があると言われている¹⁴⁾。本学科ではレベル3臨床実習Ⅰ・Ⅱの行動目標として、「職業人・作業療法学生として適切な行動がとれる」¹⁵⁾を示しているが、VR法による振り返

りを用いることで、目標に対して各学生に必要な修正行動を示すことに役立つと期待できる。

また、コルプの経験学習モデルでは、「具体的な体験」をし、経験した内容を見直し（「内省的な観察」）、次の機会等に応用できるように言語化する（「抽象的な概念化」）ことで、次の行動に繋がる（「能動的試み」）とされる¹⁶⁾。これを学生のOSCEに当てはめると、「具体的な経験」である試験中は客観的に自分の姿を見ることはなかなか難しいが、VR法で客観的な振り返りを行うことでより正確に課題を捉えやすくなり（「内省的な観察」）、実習で行う際のポイントを言語化することに繋がると考えられる。さらに、「内省的な観察」を効果的にする上で、評価者からの口頭フィードバックをメモしておき、それと評価者の記載したコメントを見直しながら、ビデオを視聴する方法は有用と考える。

3. 対象学生のビデオを活用したりフレクションの捉え方

対象学生の多くは、ビデオを活用したりフレクションが実習に役立つと捉えており、その理由として、自己の客観視ができることや評価者のフィードバックで指摘されたことがイメージしやすくなる等を挙げていた。「あまり役立たないと思う」と記述した学生も、リフレクションについてではなく、模擬患者への説明音声が不明瞭であったことが理由であった。

ビデオを活用したりフレクションが負担になるかという点では、対象学生は希望して参加した学生のため、「あまり負担にならない」が70%であったが、ビデオ撮影は全ての学生に適するとは言えないと回答している。ビデオ撮影が人に与える負担として、苜宿¹⁷⁾は、無意識にしている仕草や振る舞い、言葉遣いなどについて、普段から見直す習慣がなく、自分が考えていたことと現実のギャップを感じると負担や抵抗感を感じるとしている。これに対して、OSCEだけでなく、他の演習科目等でもVR法を取り入れることで、自分のビデオを見ることに慣れて、自分と模擬患者とのやり取りまで目が行きやすくなる可能性がある。

4. 運用方法の検討

今回生じたトラブルの改善方法として、①学生1人につき複数の試験課題を実施するため、撮影したかどうかのチェックを行う、②各試験室を別室とし、指向

性マイクを使用する、③専用タブレットを用意する、等の方法が挙げられる。

鷺野ら¹⁸⁾は、OSCE 評価者の負担を軽減し、評価の標準化を進める1つの方法として、学生の受験の様子を4方向から録画するシステムを提案している。試験直後にビデオを活用したリフレクションを実施することは、学生の記憶が新鮮なうちに行う利点はあるが、教員の負担増やトラブルを招きやすいため、後日実施する方法も検討できると思われる。

5. 研究成果の社会的意義

日本作業療法士協会教育部の調査(2019)¹⁹⁾では、回答のあった107校のうち実習前 OSCE を実施しているのは64%であり、実施している場合、ほとんどはOSCE 後にフォローアップを行っているという回答だった。ただし、どのようなフォローアップを行っているかは調査されていない。上記調査で、未実施校についても68%は導入予定と回答している。本研究成果は、OSCE 後の効果的な振り返りを行う上で有用な資料となると考えられる。

6. 研究の限界と今後の課題

これまで OSCE 後振り返りが評価者のコメントや学生の主観的な受け止め方に影響されやすいという問題点があった。それに対し、今回ビデオを活用したリフレクションを取り入れることで学生がどのような気づきを得るのか、そして、ビデオを活用したリフレクションを学生がどのように捉えているかを調査した。一方で、対象学生が希望者に限られ、学生全体の傾向を反映していない可能性がある。

今後、対象学生を増やし、より多くの学生の捉え方を反映する資料が得られることが望ましい。また、実習前だけでなく、実習後についてもビデオを活用したリフレクションでの気づきや捉え方を調査し、実習前後での変化を明らかにする必要がある。また、学生の気づきをより詳しく知るためには、今回の知見を取り入れてセルフチェックシートの質問項目を工夫し、「模擬患者への説明の仕方」や「姿勢や態度」や「技能面の課題」等、いくつかの点に分けて質問すると気づきの程度を明らかにしやすいと思われた。さらに、インタビュー調査等を行い、学生が捉えた「内省的な観察」の状況を知ることも今後の課題である。

VI. 研究助成

本研究は2020年度佐藤弘毅記念教育研究助成を受けて実施された。

VII. 利益相反

本研究に関して、開示すべき利益相反はない。

【文献】

- 1) 一般社団法人日本作業療法士協会：作業療法臨床実習指針(2018) 作業療法臨床実習の手引き(2022)。11, 日本作業療法士協会(2022)
- 2) 厚生労働省：理学療法士作業療法士養成施設指導ガイドラインに関するQ & A。
<https://www.pref.fukuoka.lg.jp/uploaded/attachment/174509.pdf> (閲覧日2022年9月20日)
- 3) 公益社団法人医療系大学間共用試験実施評価機構：共用試験について
<https://www.cato.or.jp/cbt/medical-osce/index.html> (閲覧日2022年9月20日)
- 4) 中川法一(編)：セラピスト教育のためのクリニカル・クラークシップのすすめ第3版。285-292, 三輪書店(2019)
- 5) 日本医学教育学会(編)：医療プロフェッショナルワークショップガイド。64-75, 篠原出版新社(2008)
- 6) 高橋平徳, 内藤知佐子(編)：看護教育実践シリーズ5 体験学習の展開。23-25, 医学書院(2019)
- 7) 佐伯胖, 刑部育子, 荻宿俊文：ビデオによるリフレクション入門 実践の多岐創発性を気拓く。41-57, 東京大学出版会(2018)
- 8) 大浦智子, 竹田徳則, 藤田高史, 古澤麻衣, 木村大介, 他：客観的臨床能力試験(OSCE)場面のビデオ・フィードバックによる臨床前教育の取り組み。作業療法33(2), 181-190(2014)
- 9) Giles, A. K., Carson, N. E., Breland, H. L., Coker-Bolt, P., Bowman, P. J.: Use of Simulated Patients and Reflective Video Analysis to Assess Occupational Therapy Student's Preparedness for Fieldwork. *Am J. Occup. Ther.* 68, 57-66(2014)
- 10) 日本作業療法士協会：厚生労働省臨床実習指導者講習会資料。演習4-2(2022)
- 11) 高橋平徳, 内藤知佐子(編)：看護教育実践シリーズ5 体験学習の展開。130-138, 医学書院(2019)
- 12) 上條晴夫：リフレクションを学ぶ！リフレクションで学ぶ！。122-125, 学事出版(2021)
- 13) 小林幸治：PT・OT学生のためのクリニカル・クラークシップ臨床実習ガイド 実習での経験の仕方・学び方。32-34, シービーアール(2021)
- 14) 西岡加名恵, 石井英真, 田中耕治(編)：新しい教育評価入門。60-62, 有斐閣(2015)
- 15) 目白大学保健医療学部作業療法学科：レベル2・レベル3臨床実習要項。23, 目白大学保健医療学部作業療法

- 学科 (2022)
- 16) 小林昭文：アクティブラーニング入門。61, 産業能率
大学出版部 (2015)
- 17) 佐伯胖, 刑部育子, 苜宿俊文：ビデオによるリフレク
ション入門 実践の多岐創発性を気拓く。90-92, 東京
大学出版会 (2018)
- 18) 鷺野嘉映, 高橋優三, 藤崎和彦, 鈴木康之, 丹羽雅
之, 中村浩幸：客観的臨床能力試験 (OSCE) における
4方向カメラビデオシステム使用の評価。医学教育33
(4), 253-260 (2002)
- 19) 日本作業療法士協会：作業療法教育課程における臨床
実習教養試験に関する調査結果。日本作業療法士協会誌
91, 14-17 (2019)

(2022年9月27日受付、2022年12月10日受理)

Awareness and perception of Objective Structured Clinical Evaluation in video-based reflections by third-year preclinical clerkship occupational therapy students: Preliminary investigation

Koji KOBAYASHI, Tamami AIDA, Kenta NOMURA

【Abstract】

Introduction: We had conducted objective structured clinical evaluation (OSCE) follow-up based on evaluator comments and student impressions, but students found self-reflection about their own difficulties to be hard.

Purpose: Could video-based reflection (VR) after OSCE make students more aware of their own difficulties, and might students perceive some potential usefulness in the VR method?

Methods: We explained the purpose and advantages of VR to 56 students awaiting fieldwork. Cooperative students were recruited, and 20 gave consent for the study. After OSCE, participants were asked to (1) determine their awareness of their difficulties, (2) watch an OSCE video, (3) document the degree and content of their awareness of their difficulties after VR, and (4) participate in a group discussion.

Results: Student awareness increased by ten percentage points from step 1 to step 3. Most student reflections addressed their own behavioral characteristics and attitudes; a few were about skills. Students indicated that VR makes self-awareness easier and wanted to have VR introduced, but they were cautious about using VR for all students.

Discussion: VR after OSCE might be useful for deepening reflection, but further examination of this method of prompting reflection is necessary.

Keywords: Video-based reflection, OSCE (objective structured clinical evaluation), Experiential learning

Department of Occupational Therapy, Faculty of Health Sciences, Mejiro University